李寄
註解 改正月令博物筌 十月部 一

十三

改正月博物令

笠冬之部

十月部目錄

△印ハ俳偕の季をうり物あり

○養生の法。兩風の教。米の豐凶。妙藥其外人家重宝の事ハ取々ふるゆへ目錄よハ略さん

發端　冬の由來　冬の異名　一丁

十月　卦　月支　諸子　陰陽生　異名　一丁

△立冬節　三丁

△小雪　十六日ヨリ　三丁

十月日令　此部よハ十月日の定アとする事と定アくる事と熊めもるなり

朔日　△立冬の旬　四丁

△更衣　四丁

朔日　△拜墳　四丁

朔日　△衣服の式　四丁

朔日　△進炉炭　四丁

朔日　△燒糟食ふ　四丁

朔日　△炉開　炉開會　四丁

朔日　△神送　△神の旅　△神の留守　五丁

亥日　△御玄猪　△玄猪餅　△亥の子　△神嚴重　△能勢餅　五丁

五日　△達磨忌　五丁

△殘菊宴　六丁

六日　△大興福寺法花會　六丁

△十夜　六丁

十日 △讃州金毘羅祭 六字
十二日 △芭蕉忌 七字
中亥 △水宮解尼 七字
中亥 △出雲大社神事 △神あつめ △神あり 七字
十六日 △京都聖二國師忌 七字
十九日 △京法勝寺大乗會 八字
日曜 △神迎 八字

十月令 此部ハ八日の定まりさる十月一ケ月の事をあつむ

△御取越 八字
△巨燵明 △巨燵塞る 八字

十月時令 此部ハ八十月の時候よみくる事をあつむ

△初冬 八字
△時雨 △祇園ー ぐれ △川音時雨 △袖ー ぐれ △小夜時雨 △村ー ぐれ △北ー ぐれ
△庁ー ぐれ △涙ー ぐれ △夕ー ぐれ
△松風ー ぐれ △落葉ー ぐれ 十七字

十日 △南都維摩會 六字
十三日 △御命講 △法華貳会 七字
十五日 △下元 七字
十九日 △恵比須講 七字
十八日 △梅尾虫供養 八字
△初霜 △初霜きやる 九字
△茶の口切 △口切 八字

△志ぐれ 七字
△木枯 七字
△初雪 △初雪きやる △初雪の見参 十三字
△初氷 △氷解 十三字
△冬ごもり 十三字
△冬籠 十三字
△冬構 十三字
△閉北窓 十三字

草木 此部ハ十月の草木を集めたる也

△名残菊 △菊ー △菊ー △萩ー △薄ー △刈ー
△枯 △萩ー 十三字
△冬椿 十三字
△早咲椿 十三字
△残菊 十三字
△冬牡丹 △寒牡丹 十三字
△大堂花 十三字
△冬菊 △寒菊 十三字
△水仙花 十四字
△八手花 十四字
△茶の花 十四字
△山茶花 十四字
△帰花 △ふり咲 △わすれ咲 十三字
△寒梅 十三字
△枇杷花 十三字
△室の梅 △室咲 十三字
△榧の花 十三字
△散紅葉 △紅葉散 十三字

麥蒔　十六
枯柳　十七
永の巢　十八
朽巢　十九
大根　十九
雪の下　十九
枯蘆　十九
落巢　十九
木葉の雨　十九
燕　十九
冬木の櫻　十九
柊の花　十九

生類

爰ハ十月のるいをあつめるに

鶯子啼　十九

必用

此部ハ十月一ケ月の天象乃見ゆる其外必用の事をのせ

破軍向方　十九
日刻　十九
出行作事　十九
樂事　十九
天氣　十九
占候　十九
養生　十九
衣服式　十九

生花式正

料理献立　終

十月部目録終

月令博物筌冬の部發端

凡き内ハ書るハ冬の氣の旺ずる所月令ハ曰天氣上り騰て地氣下り降る天地通ぜず閉塞しく冬となるといふ註ハ天氣上り騰て地氣下て降るハ天地にのく其位を正しうするをいふ猶委しきるけハ爲主といつる所よりて

冬由來　釋名小曰冬ハ終ゝ萬物終ゝ成る所以と有これハ冬ハ一年の終よてよろづの物成就するといふ事ゝ。和語ハ曰冬をふゆと訓せしハひゆといふ事ゝふとひと五音相通ずるなり

冬爲王　方ハ北と易の統圖ハ曰日冬ハ北方の黑道を行

これを北陸といふと有よりて北を冬の方とをるゝ。味ハ鹹をつゝさどる事ハ冬の氣ハ水ニ屬をるゆゑ海水の塩ゝやきと味とする。色を黑〻と月令ニ天子玄堂の左ニ居り玄路ニのり鐵驪ニ駕し玄旂を載黑衣をきると有く玄堂ハ北の方の堂をいふ玄路ハ黑き車鐵驪ハくろむまれ事玄旂ハくろきはたの事ゆてをとくく黑色を主とをるをいふ。臟ハ腎と人の五臟の内ゆて腎ハ水を主どる臟をるるゆゑ冬ニ配當をるゝ氣ハ精と腎精をいふ。卦ハ坎と坎ハ水の象をるゆゑ。星ハ辰と辰星北ニあるゝなり。人ハ智と腎ハ閉藏の官ゆて人の智惠をつゝす臟をるゆゑ智ハ冬に當るゝ。神ハ玄武とハこれも黑きゆゑ以て冬の神とをるなり

冬異名

。玄英。顓頊。玄冥。上天。清冬。三冬。九冬

和名。こるつゆ。くゝふゆ。きなつけ

異名註

。玄英とハ爾雅ニ出し爾雅の註ニ曰氣黑くして清英をるといふ。顓頊とハ禮記ニ其帝ハ顓頊と有。玄冥ハこれも禮記ニ其神ハ玄冥と有。上天とハ禮記ニ天氣上騰をるとを有とをり。三冬ハ東方朔の疏ニ出をる字ニて冬三月の事をいふ。九冬ハ元帝纂要ニ冬を玄冬ハ冬をいふ。清冬ハ皮日休の詩ニ冬を清冬と作をり。こるつゆハ雲の御鈔ニ出て雪氷をるゝも露のこゝをるるようなれるものをゝ冬をこるつゆといふなり。くゝふゆハ拾遺集ニ出て三冬をつきそしきぬれバとよゝて漢土ニ三冬をといふ同じ心ゝ

哥秘蔵　きなつけ　小野峯雄

きなつけとなづむる未八八帝王紀
立田れ山とそももめなくに

夫木　為相

波由るき入江の南まつ〳〵く
なるれそらぎ冬のゆげなき

俳 冬をおしむ除夜をぎき支考

ゆたけつ。冬の朝の事〻

哥 蔵玉集

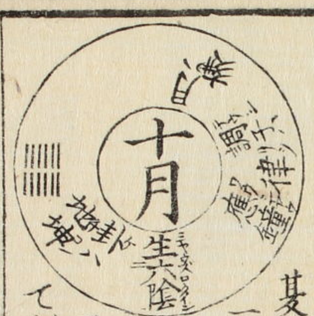
ゆと冬つよゆきてうえられば白雪乃
庭もそそこに降よけこのれ

ら川さえわ。冬を主る神〻を佐保姫といく秋を司る竜田姫神を佐保姫とい

莫の神をつ〻姫といく秋を司る竜田姫
とりふいづもも童蒙抄よりさく春
秋八俳の季に用ゐるゆゑに委
しく註に拾ふ也神祇おゝび器
の気を主る造化の神にて伝ふ各分る
○右の外三冬ふ〻る季節よ
りの八別に三冬の部有

十月の部

△印を記ス分八季をとり物〻



莫至ハ生じる一陰の上ハ月々にまた一陰で六〻なりて十月ハ六陰となりて純陰の月〻

○調子ハ律ハ〻して應鐘とい〻ハ水の成長し〻る〻ト禮記月令ニ出應ハ陽ハ應ぞるなり鐘ハ動くと心ハて萬物動きう〻る〻

○卦ハ地坤と八上の圖れぞく極陰ハて地の〻〻ち〻

十月異名

△上冬。○陽月。○良月。△無冬。○開冬。○玄冬。○秦正。○小春。△初冬

△神無月　△忘れ月　○上亥　△初冬月　△小六月

異名註。陽月とハ此月一陽ハじめてきざすといふ事爾雅ニ出たり。良月ハ左傳ニ出一ヨリ十ニ數の満る事を良といふ〻〻左傳の注ニ見えたり。孟冬ハ月令ニ出はじめの冬と云ふ義ニ。上冬ハ纂要ニ出これもはじめの冬ととい〻事ニ。開冬ハ顔延之の詩ニ作まり冬のこゝろとい〻事ニ。玄冬ハこれも纂要ニ出てはるめれ冬ニ。秦正ハ歳時記出秦の世の正月ニおくる月といふ心ニ。小春ハ事文類聚ニ十月のこゝろにて春のごときといふとあり。上無といふハ陰陽の數ニよりて名まてゝ十ヨリ上の數ニよつて此月ニ無といふ。神無月といふハ此月神々出雲国ニ集ふ故名づく出雲ニてハ神有月といふ又一説ニ此月の異名上無といふより俗説つて神無月といふ。又真渕の説ニハ此月雷聲を出さゞる也〔雷無月といふ〕。此月伊弉冊尊崩じ給ふ月ゆへ名づくと世間問答ニ出たり。貝原氏の説ニハ卦ニなぞらへハ坤にして純陰ニあれハ陽未復陽なきの月〔神ハ陽の司也〕此月陽なきの月也〔神無月といひ諸神出雲ニあつまりなどいふ事とあり其外跡なき事とあり其外説多し委しく日本歳時記にあるべし然まゝ風雅の道ニハ此論ニ不拘神なき心をよむゞ風情あり〕

てよ〻次ニ證哥を出し作例と成

哥　秘蔵　神なり月　菅原忠音

よとやまへかゝれるいとなるふなり
さゞれひまなき神なり月

莫傳　神なり月

雲ゝなる松の末ゝにおもふ
神なり月とのをいそぎて

千載　神無月　道因法師

ゆふしでひらめるねの神なびにあとれ河ゐる神無月かな

新古今　神無月　高光

神無月風よ紅葉のちるゆふそこはうとなく物ぞかなしき

(俳)神無月麼鞨の呂に本あるを野水十月小春の不性見へおくり支考

神無月髮立人まさむいりの園十垣るんやたゝらまるれ神無月支考

(哥)藏王　さゝれ月

ちりそてゝこのそのふるのゝさゝれ月冬れそじめよ何をそあまじ

同　さゝれ月

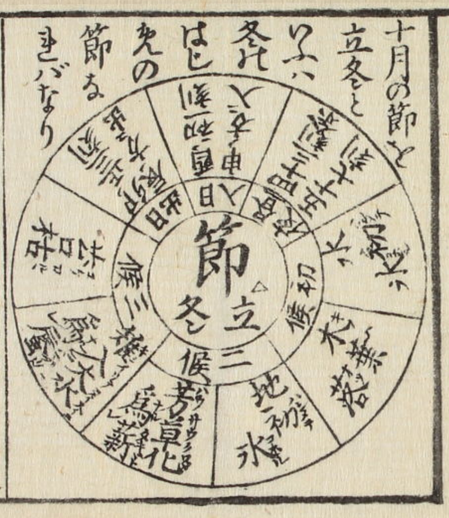
まもも本を初霜月のねばゝけるゞわも白きけさのをちうゝ

(俳)鶺鴒の尾さゝやすまる小春　后女

尾ゞもぬくもつゝふ本ゝ小春　人男

立冬

○節の名〳〵○七十二候○艸木七十二候○昼夜長短○日の出入左に記次



十月の節と立冬とハ

冬ハ　はじめの節なる

○此頃水始て氷る○木の葉落散つゝとゝ○地始て氷とハはじめて

水ゞ氷ることゝ事〳〵○芳艸爲薪とハいてるとゝ事〳〵

よきかゝいの有し秋草もこれくれしだにあるをつゝ○雉入大水爲蜃月令の注ハ蜃ハ蛟のさゝひこゝとしそゝぶりのもひそまるりのふるりゝる

とゝふゝ心〳〵ぞ○苔枯ハ草木ばゝ

よわゝゞ苔までゞ枯るとゝ事〳〵

(哥)千載さまゝぐの弟まゝもてハ

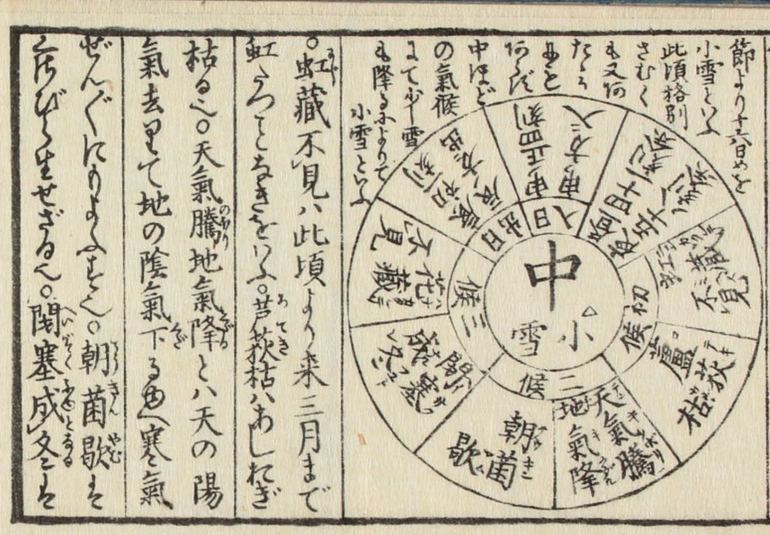
ゝれねぬゞゝりみゝゝえてきぬゝゝん

節の占候

立冬の日土ふあくれば来年麦貴し田耕宜しくば壬子なれば来年大に熱し節の日晴れば来春雨多し北風あれば六畜ふぎはひなり

小雪

。中の名〻。七十二候。艸木七十二候日出入。昼夜長短。左に記す



。虹藏不見。此頃より来三月まで虹なることなきをいふ。草萩枯れあしたぎ枯る〻。天氣騰地氣降と。天の陽氣去りて地の陰氣下る色〻寒氣ぜんぐにりよくとなる。朝菌歇。閉塞成冬。陽氣ふさがりて寒きき冬となる

。花藏不見。花は大抵陽氣を得てひらくものゆゑ陽氣なき時なれば花なれて不見なり

日令

此部は八日の定まる事を出す

朔日　。今日沐浴。髪を長寿よろこぶべし

。今日房事を第五つとしむべし

朔日　麦の旬

今日天子御装束を改めらる。南殿出御ありて節會行はる。二献の後氷魚を群臣に賜ふ。全事根元曰

哥　元弘立后屏風

法れる御代の貢とよろこびをく大宮人はうらやましけり

俳　物忌　菊の花油の皮　也有

朔日　更衣

十月朔日先づ御衣ぬいかへ掃部寮夏の御装束を撤して冬のを改めらる。天皇南殿に出御ありて節會行はる。是を盃

冬の旬とゝ〻衣更とぱゝい〻（李六四月）

（俳）陶たまゝ神と成けり更衣　李下

朔日 衣服式 諸家今日より来年三月晦迄冬の絶を着せるト紀事に出

朔日 拜墳 唐土にて今日貴賤ともに先祖の墳を拜し祭をい貢原説る本朝にても今日先祖を祭るべしといゝり唐日本の祭ゝ麥一〻歳時記出

朔日 進爐炭 唐にハ今日有司爐に燧炭を奉るし事文類聚に出

朔日 燋糟食ふ。峡人十月朔日多く蒸裏と作て節物とす。荊楚の人多く燋糟を食ひ或ハ糖と爲そ事文類聚に出燋糟といゝハ酒の滓のこかたるゆゝる物又燋糟の事ハ蒸裏もゝ山蒸裏とゝ〻てむゝる物とゝ〻

朔日 爐開 燧炉會 炉開會 今日炉と開き三月廿日炉とぢぐ唐にて今日炉を開き炉中にて肉とゝ〻ぶゝ飯食ハ是をたゝ〻ろ會とゝ〻歳時雜記出

此例により本朝茶人此日より炉を開き賓客と茶を喫ス（詩）有歳時記出

神送 神の旅 神の留守 此日諸神出雲の大社（臨幸しゝ〻といゝり麥一〻ハ日本歳時記に出ゝり面白き事ゝ〻るべし

（俳）蛍とぶ水かつゝきの神おはせし蘇生ル　蘇守

（狂）馬なゝでぬ風をぶ神のかしま立本の葉さハゝぐなをひてゝ　真魚

支日 御玄猪 玄猪餅 御厳重 支の子 能勢餅

昔ハ山猪を奉る事日本記等出。應神天皇の御代より毎歳支の月支の日を祝ひ御玄猪の餅を奉るべき詔ありて攝州能勢郡木代村坊畑村両村より貢ゝ〻る。餅を製するに當家ハ能く清め赤小豆と餅米とゝ〻て餅とゝ〻きくの花かゝで

ちのべの花葉をかいしきこれ色うす赤しこれハ家の子れ肉付表しうるゝ下學集ニ曰豕ハ每年十二子を生む閏年ハ十三子を生む故ニ婦人これを視ふといつされバ童謡ニ亥ぬ子のりちハ親うめ子うめとゆゝハ此故あるゝ○十月亥の日ハ餅をくゝバ無病長生あり蘭谿其外委しくハ歳時記拾遺ニ出ス女の祝ニ付など甚面白し見るべし

(哥)蜻蛉日記「万代をいとゝ山道のいのことより君ぞつくるよそひちるぶし

(俳)秋ぬの菊ちるものふつく麦ぬ藤　立甫
今ゆゑあけゝ夫雑の上のもちゐ小時風

(狂)隙哈とまつよゞれふきゝりゞ
さてもいのこの服れをごく　貞松

上巳

今日槐の実を食ハゝ百病を去る日

四不成日

今日房事を慎べし

五日

△達磨忌　達磨ハ南天竺の人之蘆の葉ニ乗てりろにてゝ

禅宗を弘む大和十九年十月五日寂ニ委しくハ博物筌ニ出ス

(俳)禅宗ニ達磨忌
なこ石ゝ石ゝ岩ゝ　李破

(狂)小夜ぬのぬぶふけくるかけぬも
ゝさりかゝりてさびさ寄うも　貞柳

△残菊宴　延喜の御代ニ十月残菊の宴をもよほしたまフ

(哥)秋さけるる菊よはあれと神ゝ月
附ぬよ花のゝこハろろけるる　貫之

(連)ゝれないの花菜も菊の旬ハ　昌休
(俳)香ゝて遠く知るよハひや菊の宮　嵐雪

(狂)欲をよゝ知をつゝ事ごゝくと
ひりうしそうれ残菊の宴　秀貞

△十夜　此月五日より十五日まで浄土宗の諸寺にて會式を勤むるなり

(俳)庄ゝ屋敷の香こめふ蓋る十夜ハ　白羽
いゝさ数ふ吉田ハ吉田十夜ゝ　麥里

(狂)ムハんくとゆゝをたけど答ふきる
百万遍の沒の法ゝ　松子

六日 大和△興福寺法華會 一名山階寺といふ九月晦日より千月六日まで妙法の大會をゝこなしむ此大會八聞院冬嗣公初めうゝ六日八冬嗣公父長岡大臣れ御忌日ふあるゆ其爲行はるゝよや

十日 讃州△金毘羅祭 讃州鵜足郡象頭山ふ神代より御鎮座ある神ゝ御神車八月晦日より初て十月十日終ゝ今日參詣別して多し故ふ季ゝ以。金毘羅道中記といふる本あり此本八金毘羅參詣海陸の道中を委く記以来御利生緣記哥等まて委しくのれ

十日 南都△維摩會 南都興福寺ふて古より十六日造行はるゝ

(哥)白川殿七百首　新大納言顯輔神無月問ふうおけるる法法とそあゝ此都にのるゝ乃まふ

(俳)紅葉やいなりの杜しのだし　尾霜

十二日 不成就△芭蕉忌 俗姓松尾氏初の名八半七後ふ忠左衛門宗房と改俳諧を李吟ふ學び桃青といふ江戸深川の庵ふ芭蕉一株を植うり是ふよつて世の人芭蕉の翁とよびり尤俳偕中興の祖なり

十三日△御命講 日蓮上人今日寂以故ふ法花宗寺院ふおゆゝく御影供を修もるゝみえくゆゝと云俗ふ御の字ををてゆめゝといいるゝいう

(俳)頭ふも花のるゝく金式る雨方

十五日△下元 今日を下元とりふけ七月十五日中元の取ふ一る以

十五日△水官解厄 今日水官人間ふ降て人の善悪を記る天帝ふ奏以

中支出雲△大社神事 △神あつめム神あり出雲國杵築村ふ祭神大巳貴尊ゝ祭の當日前ふ八毎年風烈く波あゝき日を

其日龍蛇藻より来て海上ふ浮む
を取て曲物ふ盛て神殿ふ納む
いり其蛇蝮蛇ょ似て銭形の斑
あり尾先ハ魚ょ似くゝてるし

十六日　京都聖一國師忌　東福寺ゟ開山ゝ
建仁二年十月
十五日生まゝ弘安三年今日寂ゝ

(排)通天の緒を為やゆ開山忌　之白

十八日　此日雑初ゝなくく時湯あゝ
もれば長寿無病なり

廿日　不成　○今日遠方(ゆ)く事を忌む
就日　○天龍寺佛國国師の忌日

廿日　恵比須講　誦△誓文拂・此日商家
一続ふいもひ日として我

△を祭り酒宴を催して客もまゝ
中ふ呉服店ハ格別あきハしくする
事ゝ商人つ係ぐ欺賣の罪を拂ふ
とて誓文拂ゝもい京みてハ官者社
る詣で是を誓文ぐしの社ゝ大坂
ふくハ今宮の戎(泰詣多し

(排)夷海邪毒に侵ゝ毒に成り芭蕉
十月の廿日もうをを拾女ゝる巴桃

廿五日　○今日人の病をゝ事なゝれ
○南禅寺の一山忌行状ハ博物筌に

廿五日　京法勝寺大乗會。應仁の頃寺絶
ゝり今ハ本尊薬師佛、東坂下西教寺ふ移り

廿八日　不成　就日　梅尾虫供養　梅尾寺ハ明恵
上人の開基ゝ

晦日　神迎　(排)法滝ふ毒ゝ成ゝ
神等の手拂ひあり祥至暮四

月令

日ふゝゝゝゝ十月一ヶ月の
雑事をゝるす

御取越　十月廿日親鸞上人御忌日也
正當日ハ本願寺ふて報恩
講を修ゝ一向宗の檀家ふ報恩講
を勤むる八當月取越て勤る故名づく

茶の場　△口切　三月ふ茶を摘五六
月ゝ壺ゝ偖てあゝご山ゝ
上し八九月ゝ渚国ゝ出ゝ十月ふハ
茶人茶壺の口を開く故口切とい

(俳)口切よ摂の庭ぞなりけり　芭蕉
口切や袴のひざふ線　蕉雄　蔦　其角

(狂)口切の茶をあつぎて後むし
むしくのたとしもやくむしもや　芳室

△巨燵明　こたつあけ　いハバ三冬をはりなるべし
△巨燵切る。巨燵とばう

時令

此部ハ八十月の時候に
かゝる事をあつむ

△初冬　十月三五日までをいふ又十月の異名なるとも十月朔日
日れ事をといふ　隆源

(哥)夫木
冬きてハことひろ初夜いつのまに
かくしく神のさくわくるゝん　範宗

類題　初冬　叡
冬来ぬよりあ山よみやいろぐらん
正木のうつゝかきちるなり　俊光

家集　山家初冬
冬きぬとこの夕ふきそふ山風に
たゞれぐちる庭ぞさびしき

(詞)冬ハきふうまぐ冬なれぬ。冬ハ
初冬。ひとしきふ。冬の来て
。きの花まる風。水。こほりて
。冬をむかふる。今朝よりふゆと
。きのふを枕と。ゆふべを西とや
。寒も来るる。みぞれもちるれぬ

△初霜　△初霜おきまる。霜のうけ
安しく冬の十月と記ル

(哥)冬来てもとびもゝ初霜
をくてはいなぐ風をよぐゝ　家衡

(連)初霜の花もかゝ重ね宗祇
(俳)初霜や取ふ綿の反ふり　支考

(狂)初霜のきまる冬とても朝食の
著をおく同の行ぞあけて　立甫

△時雨　△初時雨。ふるれの河水て季に
なるとけ次の歌同の加ふ印
ひとり。ふるれいまげくふるれ
。時の雨とくハ時ぐくふるの意ち
時ぐハふくふちよくの義なり
。初時雨と八十月ふなりてはじめて

ふる雨はいと秋のまふふる八秋のー
それとりて秋ーそれとハいそぎ。
霧雨とハ小雨の義にて霧そし
それとそあそぶ

哥拾遺　かきくもり雨ふるまはあつ
はりひとをやれかをあひの森　貫之

千載　秋ふかし七夕のんこのあろれ
木の葉にうつる秋ハ雨を　馬内侍

夫木　神無月ハさあるはまよる
ふーふーふれのそら　宗尊

碧玉　夜時雨
ふるふるあれ雲はまよひをへーこや
雨ふる夜の枕とふーん

雪玉　山時雨
みふる山ひとしもをそうーを絶へく
雨ふつきくる旧方れうき雲

同　羇中時雨
彩まを去れてゆくを雲乃ふを
ふ秋のまふふるふてやん

柏玉　河時雨
それふる雨を聞せはもう川
かふるもやを秋村ーれふふ

同　野時雨
をてふ彩くゆをにき秋村ーれ
秋ふ夢ーて夢ハふるーん

朗恒

古今　袖時雨
神　月雨ふぬふをみちをふて
ふふふふ人のたりふふ

憲實

玉葉　松風時雨
ふるふれーー山の木の葉ハふふて
雨ふをのこをふのまれ風

公顯

同　泪時雨
ををみちをを秋のふふふふても
ーーそれとふるハ泪なふふふ

詞　△川ふの時雨　川ふまれふ
なふふの袖ふ
かふふをふ　△小夜雨　雨ふ秋ふふ
夜のーれ

△袖時雨

△村雨　ひとしきりつ降
てむふあをのふ小

△小雨　小の方ふ
ふふふふ

△片雨　一方なれ二方
ハふふをふ

△泪雨　泪ふをなふ
をーれ

△横時雨　風まじりの時雨　△夕時雨

△松風時雨　松風に時雨

△落葉時雨　おちしく葉の落る音

○しぐれそめ　しぐれの糸。しぐれ

連　時雨も延日数かさなる宗砌

雲は行ぐるほの世のしぐれかな心敬

俳　川音に時雨くらり出用舟　支考

初しぐれ猪も小首を傾げ　芭蕉

志賀記

時雨ふる風の交るを奏しく

三冬に雪を降るの條おのづから

俳　さびしさ金柑を採まぬ枯れかな　闇指

木枯

△風と云。木枯しの風と傳

秋冬吹風を木をうゝ吹ぬ

多は秋冬ふるあり俳よみの季キ

俳　木枯の名は竹林に似るべし　芭蕉

哥　千載　ふるさとの冬の山風はげしさまさる木枯の

冬のまの風はげしきを　定頼卿

液雨

。唐聞中の俗立冬の後十日

を入液とす液とは冬ほ

初雪　△初雪　。若は初雪の降れば花とされを見赤とい

赤内さしれ　。浅雪は初雪に同じ　此外雪の字は三冬の部に出

哥　拾遺

ふるやこよてちづしとる初雪は　景時

ゆき山ふるりやちぬ〜ん

新古今　贈西上人

ひとりもちのやれ形ぞうつまるく

ふは形ぞうつ月ちる赤ふる

詞　ふりもむる。ひとあり。初雪は光。つもりも

やぬ。ふりもりぬ。初雪は。初めぬ。初めつし

連　初雪は屋谷のちりもし　宗祇

俳　初雪にまぶすう系の妾小　其角

初雪やはいをひ庵ふ形ちる　こを

初雪や痕のくぬ岩の上　淡々

ぬそうなる内傘の初雪を見　如水

初雪や木地挽く谷の夕烟　紹鷗

詩　初雪詞

瓊林瑤樹忽珊々急帯西風下

晩天　タマノハヤジニタテノ水ガハヘタカト
オモフホドオモヒガケナウキラク
スレバキウニ西風ニツレテハツ
ユキガフツテキタノシヤ

柳絮三冬ノ先　北地ヤナギノワタガ冬
ノウチカラキタグ

二二八ウチルカ　梅花一夜遍南枝　ムメノハナガヒトヨサ
ノヽニミ十ミノエダニサキソロウタカト
オモヘバハツユキガフツタノデアツタ

△初氷　冬ニ十三ヨリ三月ニ

哥　千載　きのふこそ秋の花しいけ乃
まにいさゝの水むすぶ　公實

俳　行あの一夜うゐりや初水　里隠
初氷と船ハ走りのある　松乃風　韓愚

狂　ゆあ御殿ふとみづの二三枝
むもびもまくる新もぐらの邪　貞史

△冬ざれ　冬ニ十三ヨリ三月ニ
冬ざれハ冬ふしあれどいふ之
冬ゐて初さひしたもろにあ此

△冬籠　冬ニ竹本ニモ花ニ花ニ落テ精気地中ニ入ル是ヲ冬ヤリトハ
三月

又一説ニ冬ヲ冬ナレバ家の内ヲ冬ヒ
ルヲ冬ヒトモイフ冬ハ三冬ヲシテハし
哥　雪ふれば冬こもりせる草も木も
春を待とは花ぞ咲ける　賢之
ひさもなく冬ぬる紅をおびに推まして
庭の冬ゐきも冬ゐ冬ゐとそう　出宗聽院御製

俳　冬籠の松の古びや冬ゐ芭蕉
武里八山城ヒ方ヨリ冬ゐ支考
冬ゐ　ちがま仙人もゐこもり　野水
冬ゐ冬ゐいらいて冬ゐ木の葉ノ小鶴十
冬ゐ冬ゐ冬ゐ冬ゐ冬ゐ冬ゐ冬ゐ冬ゐ冬ゐ
冬ゐ冬ゐ冬ゐ冬ゐ冬ゐ冬ゐ冬ゐ冬ゐ冬ゐ
冬ゐ冬ゐ冬ゐ冬ゐ冬ゐ冬ゐ冬ゐ冬ゐ冬ゐ

△冬搆　冬ニうゐまハ冬ニよなりてまく
とそう　炉をひらくもうなる
事をして寒をふせぐ支度をする心へ

俳　冬搆かるも枝の冬ゐまへ　白扇

△閉北窓　北風ハしけしきりのめへ
北風をよけるゑ支度へ

草木

此部十月ノ草木ヲ集ム（冬）と
印ス冬三月ハ景物ニ用ヒテ此

名草枯 △葛うる △菊うる △萩うる △薄うる

△萩うる △女郎花うる △艸うる

衛傘よハ花の字結べハ秋之とぞ

(俳)女郎花咲ても咲ても附もあり 鬼貫

煙ふうるちうもたゆミ蒼ハれ 言水

冬椿 △早咲椿 椿の花ハ春く冬椿者と早開と名て人賞之とい可

△

残菊 九月咲のこうる菊ろう 貫之

△

(哥)夫木

秋さける菊よハあれど神無月

しぐれよ花のえハ深けるる

(狂)一ゝせの花のかぎりを秋の末

ふ代の数ふど数り多さよ 舊徳

(詩)残菊詞 唐大宗

細葉周輕翠團花飛碎黄

還將今歲色復結後年芳

細カキ葉ガ三ホニナガラ青キイロアリハナノ一ルク咲タルモミダレ飛デ黄色ニミユルナリコトシハコレガナゴリナレドモ又来年コノイロカヲモツテサケヨト心ニチギル

(詩)残菊五字對句 同上

闌珊陶令宅晩駁霜凛冽

サキミダレタルトウエンメイガイヘ ミモガワヨクオイタ

寂莫費公房晩逐露離披

ヒトリ花ガシホムトミニハ

モノサビシイ費長房 明カタニデミレバツユ方ハラくトオイテアル

冬牡丹 △寒牡丹○十月ころ花さく十二月までもあり 大和本州ハ出さり

△

(哥) 雪中牡丹 元政

雪ちくたる花ハきつむ重るも添く花

九もたくふ綿とこそ入まと

(俳)重ね咲ても雪を紀る牡丹一菊

(狂)さむそうな形りホ咲くる雪牡丹

花の風気とい不べ雪りくと 麥峯

犬莖花 ○石蕗も書く(俳)ちり完ホ

△ 書の笠さ花犬莖の花 右山

(狂)口なしの花ハ咲しをいろ〳〵て

花ハの花とハいとやみ〳〵 高貞

冬菊 △寒菊○多く花八重之葉

△ 三冬 てりて赤を賞ス 長名 雪見州

○秋無艸同○霜見艸蘘○のこり艸藻塩○初見艸藏玉は出生つれども初見艸說多し寒艸の事ゝもの〻

哥　夫木

むらさきのこゝろゝ雲やのきくにまゝ
白きこうはだとゝ人ゆるゝ雪　式子内親王

藏玉　初見艸

玉ぶれる露ふゝくしも初見草
花咲くよりもおゆ雪らん

連　ゆき玉ぬ菊さく谷の南々な宗碩

俳　雪にうもれぬ天窓の上ふ菊の杖　嵐雪
後殿のつよゝみすの見ゆ雪の菊　梅翁
雪を菊やはめふ月せてきゝ雪ぐり　五流

狂　ふちて後紅葉のゝこゝ雪ぐるふ
雪ゆおくるうめん菊の花　嘉友

詩　寒菊七字對句　詩礎

顔色却因風露染　愁雪葉
ハナノイロハケツウニカゼヤツユデ　雪ヨイヤガル葉
英華不畏雪霜欺　傲霜枝
ハナノフサハユキヤシモノアナドル　シモニヨハラヌヨダ

水仙花　千葉あり單葉あり一重の物花白く花心黄ゝ

俳　水仙ふあの月床し陸子紙　支考
ふ仙や一りと花と思ひすく　舊国

狂　竹えの云月ゝしかくやむえいや
まゐおゐゝゝゐ仙のゝれ　計白

詩　水仙七字對句　詩礎

墓盞元非千葉種　付雲來
コノ水仙ノヒトヘハナハモトヨリ

半容要是小蓮花　不染埃
コノハナノカタチハカナラズコレ
チイサイレンゲトミエル

八手の花　葉の岐七八あり形紅葉の葉ふ似く大ひゝゝ姿ゝ

花白く小ちくして黒實のるなり

俳　つぐひふ八手の花や水なゝり　荷風

妙藥　おこりをふるゝ人此木の葉ゝ六字の名號をうきつゝのおとく

ちんじゝく數杯飲い志ぐゝくし
てさいとぐゝく吐し忽ちおこりおつる

多く呑むをよしとせん。実を食ふ屋うゝに毒あり

△茶の花　白花ゝ　俳　菓の花や色も丟旨の抽ぬし　支考

狂　花の色ハ茶ふよりすくなく山吹のかゝてぞ志ろきゝ雪の丸でと　自禾

△山茶花　南方艸木狀ヨ曰山茶花數種あり。寶珠茶

○石榴茶。海榴茶　花の中ヨ咲

○躅躑茶。羨莉茶。宮粉茶

○串珠茶　皆粉紅色とあり葉ハ各同じゝゝと云ゝ是ふよりく見るゝハ今茶人ゝの賞に數種のつぐきたゝ　ぐし季寄ふある春の部れつぐきといつるハ海石榴し椿の字ふ忽ゝハ誤なり

俳　山茶花や沢をなゝく竹屋鬼貫

山茶花や芙白もひゝゝ欲ゝん　其角

狂　つぐきゝゝもおもゝじかくちをハゝり

こも淡紅の山茶花のな　信面

△歸花。狂花とゝ　△ゝもゝ咲。かゝゝ

。櫻。山吹なゝのるい此月三三

さく事ゝりまゝゝ多きゝゝき

とあり尋常の花とハかゝじ

けゝく賞ゝるに足ゝらん

俳　逃　昊も去きゝくゝいゝゝ田井

歸花の人も入ゝゝ　三惟

歸花故事

雅櫻宮

履中天皇三年冬十一月天皇池中に舟をうかべ皇妃ゝゝと遊宴に膳臣酒を献る時櫻花杯中に落ちり天皇これをあやしみ問ふ是花時ふゝゝしていづれの取ゝゝ来るやゝゝ物部長真膳連ヨ勅ありて其花の来る取を求めしゝゝ室山ヨ得ゝり天皇其ゝゝゝしきをよろこびきひて即宮の名を雅櫻と名付ゝり是ゝ花ゝ日本紀ふ出ゝり

寒梅　十月の季に入る俳書も有十二月にも侵しく十二月に謂著

枇杷の花　白き花にて八月より咲臘月までもある花に葉は四季とも散らず実は五月なる花の頃より実の熟するまでの間九十月なり故自然とよく熟して味ひよし

俳　脱肛の厠に枇杷の花見くる鬼貫

ふるさとにも品せし枇杷の花紹鷗

狂　ふるのすにいとをかけてぞびこの花ばらばらもくくと落る木がらし　遊野

室の梅　室咲室の温氣をうけてくく未時花をさく

俳　室をもて面白をうり花の室李四

咲室のまれまの紅や宮の梅　林西

榧の花　木を烟草とするあいみやとい

油をとる物はいぬうやまて食べ

べらべらの小木にてよく実を結ぶ

俳　いつてぬうれ水宜ふ榧の花　立甫

山ゑう榧の花えんやうれ乃朝　山川

散紅葉　紅葉散て物と染る冬ごと御傘を出す

哥　古今　泉川よりをふ山のもみぢ今まさるらし千載　邦　ふかまぐさ紅葉ふみそえしらども紅葉ふちをしくぶ川の冥　頼政

連　紅葉ちりひのこる紅葉ふ肖柏

ちりちれ紅葉ふかけるらん　宗碩

俳　戸を叩く紅葉ひろ紅葉路外

窓の音せもて二枚を紅葉曲巴

狂　ふしきをばちりしく庭の上ふそ

ぬるでもあるふとうやまれ　貞柳

麥時　漢土八秋種を下せしも本邦十月ふ下して四月黄熟に是亦早中晩の異有。日本後紀稱德帝大臣吉備ふ勅ありて天下の百姓ふ大小の麥を種しむといひも其時をうしなひ

て遂不成其後嵯峨帝弘仁十一年冬嗣公に勅ありて今うの八月小蒔しと是より時を不失といつり

(俳)麦蒔や蕎麦ふ八月ふ自ら一人ゝ　朔平

枯蘆　(詩)よハ寒蘆しゝ

(哥)新古今　西行

(三冬)

津の国の難波ハ芦ハ葦なれや
なしの枯葉ゝの風わたるゝ

あしふくたうふそしな難波江の
あさばまーらぬ芦の村立成通

難波ゝ江の芦ハ芦おゝれてたゝゝの
枯ゝ葉ゝ風ふくうら　二條院讃岐

(詞)あの下なる芦。風さゝゝ。ふれ芦。ふゝぶれ芦。あのうれ芦。あゝおれ芦。

(俳)ひまあれどさむくて人ハ昆陽の芦鬼貫
枯ゝ葉や芦生れちぶ芦ゝ芦ゝ　支考

(狂)草も木もさうふ支すきなきゝの
枯ぎるおもしもれ合ふうり　貞水

枯柳　枯柳、文ゝ柳し同じ心ゝ
(三冬)　柳のうれゝも枯枝ゝもよめり

(哥)萬葉　あれのうれ柳ハ人のおつゝふすゝくりえふるうな

(狂)あるうれバ葉ハなし茅なし枯柳
枯人ひとりゝくゝ立てなるゝ　樂自

(俳)浮葉ゝ立てゝ立や枯柳　五樓

落葉　諸木の葉風ふちり沈くを
(三冬)　いふ。又木の葉ふれちり落る
もいつり立田川よる流もせきてゝ
ゝ風ふちりちるぶれ松もいつり

(詩)落葉七字對句

風林脱葉　山容瘦
霜稲登場　野色寛
雪雲映月　鱗々色
霜相葉飛　空蔵々聲

(哥)末葉ゝ風ふそ一葉ぶれなきゝ山ハ
中ゝ風のまもきて　和泉式部

連　神無月この冬至ある時まふのあ　智薀
をくまれ白くをめなれ時まふ　宗砌

俳　一葉ちりいそぐもちりて月板小　嵐雪
もしくまや木のまふまを割る用も井　桃戸

狂　西風のさむい附ふ極ふをさそな
かけ蔭まふと月ゆる天王寺　徳春

木の葉

△木葉舟　△木葉衣。木の葉、
つげ中うゆて木まある葉とも
△三冬

いどそれハ和哥などふていふ事ハ俳の季ふ
出ぬのいろう落くる木の葉をいふ

木葉衣ハ木のまふを衣まさそくるく
又仙人など木の葉を衣とする故事にの

木葉舟ハ舟と一葉といへども立秋の條
に一葉舟の故事ゆり考合べ

こうし・あめ　△木葉時雨。雨のふる
ごとく木葉のちるをいふ

木葉の雨

△

詩　風吹枯木晴天雨　白氏文集
風カ枯木ヲ吹ベ晴タル空カ雨ノフルヤウナ

連　そあくてちるも附面の水まふの形　宗祇

俳　客ゆある三ふくと木葉う郭　孝室

狂　人なくて木の葉をあのまををあのまるをくん
嘆を八月のもりくくり　貞左

朽葉

木の葉の地上ゆ落てち
なくをいふまくゆ枝ゆ有
△なぐく葉のちくうをもいく

哥　夫木　刑　まれぬ打まふハ下にぐ
まりて紅葉ふ吹やる庭の木ぐ　為相

俳　散もせで庭にさくまき朽葉ふ　矩州

狂　ちるまるもなくて打まふの口惜や
口惜やくて沙まるまもあり　舊德

蕪

△蕪菁　又蕪菁　△冬
根のあくふ　鬼貫

狂　ちくくもりと月れぬ生でせうと
月れいなくく移て　良室

大根

△大根引　△おほね。蓋ふ似て根
大ゑ故大根といふ　蘿蔔

俳　ゆゑ乙女が書くるう大根ー野坡
手ゆ附いまのくく脇のおは移ふ　宗雖

冬木の櫻

△冬木の櫻　冬ゑ咲くけくくるり

雪の下　花冑月〻鷸蚌を高物うべし菓を冬も盛〻雪こゝの名ふよって李ふ

△月

柊の花　魔こゝきハいらもき秘蔵よ出いらと苛〻葉に刺有故い〻

△

生類

此部ハ十月一ヶ月の生類をあつめ出ス

鶯子啼　(俳)人のこれなく然よくきゝほいる　湖中

△

(狂)そるハさすぶ法花のかいぢを子もめゝなゝふ志わしい夢　井魚

必用

此部ハ十月一ヶ月の天氣の見やう其外必用の事をのせ

破軍向方

破		軍		向		方	
夜九ツ巳ノ方	夜八ツ寅ノ方	朝六ツ辰ノ方	朝五ツ巳ノ方	昼九ツ未ノ方	昼八ツ申ノ方	暮六ツ戌ノ方	夜五ツ亥ノ方
夜七ツ卯ノ方	昼四ツ午ノ方	昼七ツ酉ノ方	夜四ツ子ノ方				

日刻　戌の日戌の刻亥の日亥の刻事をなすに用ゆる事なり

出行作事

東方ハ向ひてよし　天道東よ行月〻

樂事　小春の長閑なるに面を北すして供〻なる日光に

脊をけゝしして暖和を得るハかの貝暄黄綿襖子と昔の詞もむべゝ

瓶よ酒をあゝめ獨酌あるハハ對客炉辺のまゝねよ風寒を志のぎてハ春和まもやゝゝず又枯枝ふゝり咲花のけーきづゝうちゝ

天氣　今月まゝりの西風八日もつきて大三けふちる物之

西北の風ハ日和をつゝさゞる紫乃雲ゝてバ大風く戌亥の日雲あれバ風生じ。電あれバ大風あり。今月八雨の後よ風吹くゝ東南の風ハ久ーゝゝびゝ

占候　虹あれバ不作よて五穀貴ビ。初のきのくねにあゝれバその冬大小寒ビ。十九日晴るれハ冬大よあゝ申の日寒

うゝざんバ暴死多し。東の雲たてバ雨ふらもひあり

養生　此月暖帽といでく事なゝれ腦を冷すべし　暈の病なし　みくりふ針灸よゝ〳〵血澁して凄澁ゆゑ座す　卧西方ゝ向ゝしかゝるべゝ〳〵をしゝむ事をもちるべゝ〳〵

衣服式　当月より綿入と暑るべし　移菊表紫裏青　黄紅葉表黄裏藤

生花式正　○残菊。茶花。寒葵。○限笹。霜ふり五葉。○寒竹。かしま松。唐松。大山樒。○つハの花。ゆつり葉

○此月紅柿の仕やう。梨みう。たくゝ〳〵。香の物漬やう秘傳。ぞく。梔子。木芙蓉。うゝ種蒔の品く其外當月用意の品并ふ養生の仕やう等委しく自本歳時記。知術全書等ふ出故略ス

十月飲食並料理献立

禁物　山嶽と多く食へい血脉と破る。ふらふ食へい溺多く出る。霜ふ枯うるへい面のいろふ損ぞとうる菜と食

好物　今月羊と食して益あり。○雀肉　冬三月これと食へい陽道とれこゝ人ゝて

料理

汁　つぶ志ほ汁　小まゝ　小花ゑび　まゝ　ふゝ〳〵げ皮　かき　やうたぶく　きくるふさのとう　やたぶる　せうれんぐ

清汁　あいる　きんこ　漬れ汁　かしゝと　千房　こせう　きをご・ゑもこと　大こん・ぜうが　ぜうが・きんこ

膾　朝・せんまる　大こん・ぜうが

ふな細つくり　うど　木くらげ　いろは
白うを　うぐい　出しつけ
梅仕立いろは

差味

ぼらひら作り　うぐい　とさを
なまこ　ふきう　木くらげ
うり　せりかぶ
たい・鯛・たがろれ
かげさちく　いろは

ふなびき　こうば　木くらげ　なんぢす
鮒・出しつけ　うぐい　いろは

いかい・和じき　せり・なんぢす

かさ　水ごえ　たがりて　たこん・いそくらげ　ちさびさを

煮物

鴨・あんかけ　ちろさき

ひらうけ　梅ぶう

大ちろ　梅しつけ・こうを　うすくづ　白

きんこ　細づくり　きすご　ひとぶ　ゆうれ　ごぼなう

ぎたき　ぎんなん・木くらげ　ちろさき　ちくび

ちのしろ　せごし　むーて　ちろきかぶ　しいたを

和會物

ぎったら　もにーて　せんごぼう　ちがしを

さばあ・うど　ちんせうを

いせえび・出しつけ　みぬきあみ　そをを

たこ　木くらげ　ちくびを

吸物

ふーしがい　ぎんなん　きあく

たこん

しいたを　ちくを　ちろぐんまう

赤うい・茶せん豆腐　かくーしきう

鴨　せり　ちんあつ

かーいあづくり　ちろ豆腐　ぎうど

もろ豆　あさびらづけ　ねきあに

精進

汁

ちく物ぐつ　せりちくきを

あさびらづけ　出しつけ

長いもちん　ちろ先

あげちんく　かくーちく

大こん小角　ぶたぶ梅しつけ

やたふ・ちさ　わら先　ゆば

大こん小角　ぶたぶ梅

清汁

ゆりね　ぎうど

小梅ぶーし　のりちくん

実ちるを　みる

松あ　ぶんを見

志先ど　ちへせんど　のり

膾

大こん・ぶんどん　あげふ・出しつけ　ちり・ぎうど

ちろべくき　ごぼうちん　ゆで

差味

さいもの　枝くり　ろう栗

ぎあんばう　まつこぶ　ちんぎく　本くげろう

煮物

ほう　ひたし　ほそ竹のこ　ひるやき　よめな　ふのさけ

ろう栗　ちんごぼう　ゆで

和會物

まつたけ　きくらげ　にんじん　ちそう

うぜん　うど　柿のあく

うぜん　ちんあく　まつあく

吸物

ちくわ　うすくち　ちくび

よせぎんなん　やたがら　こしやう

時物

魚

うなぎ　かれい　かます　たい　さより　うづら　きすご

青物

かぶら　たらん　にんじん　ほうれん　せり　くるみ

きんかん　ちくび　牛房　めうど　わらくまんさう　ゆ　ざくろ

防風　ぎうさう　ぎういも　ぐんあん　ぎあんぐう